

博物館リエゾンの養成プログラムの開発と体系化に関する実践的研究 教員のための博物館事業を例として

○永山俊介^A, 小川義和^A, 岩崎誠司^A, 亀井修^A,
久保晃一^A, 渡邊千秋^A, 平賀伸夫^B, 林 浩二^C, 島絵里子^D
NAGAYAMA Shunsuke, OGAWA Yoshikazu, IWASAKI Seiji, KAMEI Osamu
Kouichi Kubo Watanabe Chiaki HIRAGA Nobuo, HYASHI Kouji, SHIMA Eriko
独立行政法人国立科学博物館^A, 三重大学^B, 千葉県立中央博物館^C, マラヤ大学^D
【キーワード】 理科授業, 博学連携, 博物館学習, ボランティア養成, リエゾン

1 目的

学習指導要領の改訂に伴い, 博物館・科学館などとの積極的な連携, 協力が明記された。現状では, 学校と博物館の教育をつなぎ, 教員と博物館職員の人材の交流を図り, 理解を促進する場を設ける人材(本研究では博物館リエゾンと呼ぶ)が不足している。⁽¹⁾

本研究では, 学校と博物館を円滑につなぎ, その機能と養成方法のシステム化と実践的な養成プログラムの研究開発と体系化を行い, 学校と博物館を「つなぐ人」, 博物館リエゾンの養成方法を明らかにし, 社会への実装を目指すものである。

2 方法

本研究は, 当館のボランティア制度を活用し, 博物館リエゾンの養成プログラム(以下, 養成プログラム)の開発・体系化を4年間の計画で行っている。

本研究では, 抽出した不安因子⁽²⁾から, 養成プログラムの開発における3つの構成要素を明らかにした。

- (1) 学校の教育活動の理解 (学習指導要領等)
- (2) 子ども対応 (子どもの疑問や興味・関心の引き出し方)
- (3) 学習支援プログラムの習得

この構成要素をもとに養成プログラムの開発を実施した。

3 成果

博物館リエゾン養成プログラムの概要

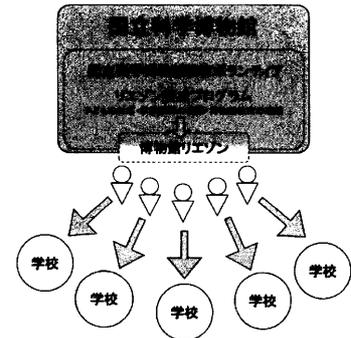
① 聴く&引き出す・つなげる【子どもとの対話】

当館の博物館ボランティアを対象に, 子どもたちとのコミュニケーションを円滑に行い興味関心や疑問を引き出し, 一緒に考えることをスタンスとしたプログラムを開発。「子どもの疑問や興味を引き出し, 展示・資料の観察や, 子どもの日常につなげるには」をテーマに, ワークショップを中心に行った。

② スクールウォッチング【学校教育の理解】

学校教育, 学習指導要領とは何か, 地域社会と学校の役割, 学校現場が抱えている課題等を学校教育について総合的に理解する。また, 授

業の参観や先生との交流を通して, 発問や意見の広がりや掌握, ウェビング法を活用した課題の設定方法など子どもとのやりとり, 対応のコツを学んだ。



③ 骨ほねウォッチング【学習プログラムの習得】

当館の科学的体験学習プログラムの一つである4年生の理科で新設された「骨と筋肉」に関連するものを養成プログラムとして位置付け, 来館する小学生の団体向けに今年度から事業としてスタートさせた「かはくスクールプログラム」の中で実施し, 実践, 及び検証, 改善を行った。

国立科学博物館では, 教員自らが自発的に博物館を楽しみ, 博物館について理解を深める機会として「教員のための博物館の日」を事業として実施している。この事業の場で, 博物館リエゾン養成プログラムを実施し, 学校の教育活動の理解を図った。

4 今後の課題

開発した養成プログラムについて, 「ただ教えるだけでなく, (子どもの) 考えを引き出していくところが難しい」との声が複数出ており, 継続的な検証, 改善研修を行っていく。

養成プログラムは, 博物館教育の特性をふまえた博学連携のねらいの理解, 学校教育の理解, 子どもとの対話, 学習プログラムの習得, という内容で整理し, 今後はさらに養成プログラムを精査していきたいと考えている。

⁽¹⁾ 小川義和(2003)『学校と博物館をつなぐ学習活動の現状と課題』科学教育研究

⁽²⁾ 永山俊介(2011)『博物館リエゾンの養成プログラムの開発と体系化に関する実践的研究向小金小学校の連携事業を例として』日本理科教育学会第61回全国大会